交通社会の諸問題を質的・個性記述的に解決する意義と方法

企画・話題提供者：大谷　亮（(一財) 日本自動車研究所）
司会・話題提供者：小菅英恵（(公財) 交通事故総合分析センター）
話題提供者：中西　誠（株式会社電脳）
話題提供者：中野友香子（科学警察研究所）
話題提供者：横井川美佳（京都市児童療育センター「なないろ」）
キーワード：道路交通社会・質的/個性記述的研究・実践と理論

【企画趣旨】

道路交通心理学の研究目的として，人的要因に基づく交通事故の分析や機序の解明，運転適性検査の開発と運転者の選択，交通参加者への教育や啓発，人間特性に基づく自動車や道路交通環境の設計，法規や基準または標準の制定等への貢献があげられる（宇留野，1972）。

上記の目的に対して，一般の交通参加者，または子ども（大谷，2021）や高齢者等の特定母集団の心理的特性を量的かつ実証的に解明し，普遍的な事実を導き出す法則定立的なアプローチが主流となっており，適性診断機器の開発，一般および特定母集団への教育・啓発，さらには自動車や交通環境の設計等に資する資料が得られている。一方，交通参加者一人一人の悩みや課題等に対して，質的かつ解釈的に理解する個性記述的なアプローチの研究は必ずしも多いとはいえない。

交通事故死者数が減少する中，更なる低減に向けたきめ細かな対策の構築や，発達障がいや高次脳機能障がい，常習飲酒運転者等の臨床的対応等が求められる現場の状況を鑑みると，質的･個性記述的なアプローチに基づく研究の重要性は，今後も益々大きくなると考えられる。

本企画では，小菅英恵氏，中西誠氏，中野友香子氏より，交通社会の諸問題に内在する質的・個性記述的研究の必要性や意義等についてご紹介いただく。また，横井川美佳氏より，臨床領域における質的・個性記述的研究の実践例をご報告いただく。以上のご講演を通して，交通社会の具体的な諸問題を例として，質的・個性記述的研究の意義や課題を抽出するとともに，話題提供者間の質疑応答の後，フロアの皆様との領域を超えた議論を行う予定である。

【話題提供】

●小菅英恵（(公財) 交通事故総合分析センター）

高齢者の健康，安全，モビリティ維持は，我が国の重要な社会課題であり，近年，教習所と共同で，認知機能が低下した高齢者個人への安全運転指導の介入研究を行なっている。

高齢運転者は，独自の運転経験と個別の加齢変化の相互作用から個人差が極めて大きい。そのため，運転者教育の現場では，ヒューマンファクタの普遍法則だけでは，高齢運転者の理解や，個別対応となる問題改善に当てはめることが出来ない。

事故を起こさない運転を行うのは一人一人の運転者である。介入した相手の体験や意識にも目を向け記述することは，実学を目指す交通心理学において，介入相手の理解だけでなく，どのような介入手法が効果的なのかの見極めや，別の事例の行動等改善の具体の手がかりを得ることにもつながるのではないか，と考えている。

●中西誠（株式会社電脳）

近年，飲酒運転による事故は減少傾向にあるものの，酒気帯び運転で検挙されている者は年間２万件前後（内閣府，2023）と後を絶たず，飲酒運転で検挙された場合，その多くは運転免許取消処分か長期停止処分を受ける事となる。飲酒運転を繰り返す背景には常習飲酒者の存在が言われており（内閣府，2007），違反処分者講習カリキュラムの中にある特別学級では，飲酒運転違反者を対象とした飲酒学級が行われている。筆者が担当している飲酒学級では，長期運転免許停止処分者を対象とし，カウンセリングスキルを用いた受講生との対話を通して，再犯を防ぐための臨床的アプローチを行っている。その中で，飲酒運転者に対するアプローチの有用性と，長期停止処分を受けた飲酒運転者の類型化について，質的・個性記述的研究の意義を考えてみる。

●中野友香子（科学警察研究所）

本報告では，幼児の親を対象とした交通安全教育に関する研究事例を取り上げる。就学後に子どもだけで出掛ける機会が増えることを踏まえると，就学前から親とともに徒歩で移動する機会を活用して家庭教育を繰り返すことは，子どもが交通ルールを遵守した歩き方を習得するために有益だと考えられる。そこで，この研究では親による主体的な家庭教育を促すことを目指し，親向けの教育プログラムを試作して介入実験を行い，試作した教育プログラムの効果を検証した。

この研究事例では，量的データの統計分析を行うことにより，当該教育プログラムが想定通りの効果をもつことを確認した。さらに補足的に収集した質的データから，教育プログラムが想定外の効果をもつ可能性や，想定通りの効果を確認できなかった参加者の特徴について示唆を得られた。本事例を通して，質的・個性記述的アプローチの意義を考えたい。

●横井川美佳（京都市児童療育センター「なないろ」）

幼児期の子どもたちは，活動や興味の範囲を広げ，自らの世界を探求していく。保護者から離れ，主体的な行動が増えていく時期である。交通安全の基本的な知識やルールも，この時期から身につけていくことになるが，理解したルールをうまく遂行できない場合も多いと考えられる。

本報告では，発達に支援が必要な幼児期の子どもたちの「飛び出し」への対応について事例を取り上げる。「飛び出し」は「衝動性」のような子ども自身が持っている特性だけでなく，保護者の関わりや環境条件が大きく影響する。子ども・保護者･環境の視点から状況を整理し，どのような対応をすると，子どもたちと保護者の方が気持ちよく安全に帰路につけるかについて検討した。この事例を通し，実践による理論検証や仮説生成のあり方を提起し，理論と実践をつなげるための質的・個性記述的研究の意義について考えたい。

【参考・引用文献】

宇留野藤雄．（1972）．改定 交通心理学 技術書院．
大谷亮(2021).歩行者事故低減に向けた子どもに対する安全教育および周囲の監視に関する研究.2021年度運用益事業（研究事業）に関する研究報告書.https://jibai-info.jp/result/pdf/2019-2021_seika.pdf（参照 2024.04.22）

（おおたに あきら・こすげ はなえ・なかにし まこと・なかの ゆかこ・よこいがわ みか）